

カラフトマス

Salmo(Oncorhynchus) gorbuscha

サケ科



カラフトマス（撮影：妹尾優二）

名前の由来

樺太（サハリン）のマス。「マス（鱒）」は「増す」でその繁殖力が旺盛なことから付いたという。別名の「セツバリマス」は、産卵期になるとオスの背ビレ前の背が著しく盛り上がる（背っ張り）による。漢字名：樺太鱒

特定種

該当なし

形態的特徴

全長55cm。背部は濃青色から青緑色を呈し、側面と腹部は銀白色。背面や尾ビレ、脂ビレに大きな黒い斑点がある。脂ビレをもつ。脂ビレとはサケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる、背ビレと尾ビレの間のヒレ。条《スジ》がない。稚魚には、他のサケの仲間と異なり、パーマークがない。

産卵期になると、頭部と背部が黒っぽい灰色で、体側が赤紫っぽい茶色となり、腹部が白くなる。メスの体型に変化はないが、オスの口先は非常に伸び、下あごが上へ曲がり上あごがそれに被さるように曲がり、さらにオスの背ビレ前の背部が著しく盛り上がる。

類似種と見分け方

同時期に遡上するサケ（シロザケ）。カラフトマスには濃い色の斑点があり、腹部が白いので、サケとは判別できる。



カラフトマスの尾ビレ
大きな黒い斑点がある
（撮影：堤 公宏）

一生

産卵盛期は9～11月。ふ化後、翌年の4～6月に産卵床から浮上した稚魚は直ちに降海し、一晩から数日で河口に達する。

6月頃、2歳（ごくまれに3歳）で母川に向かう。ただし母川回帰性は弱く、母川以外への迷い込みが他のサケマスに比べて多い（約40%）という。7月頃から遡上が始まるが、遡上盛期は8月（西暦偶数年）あるいは9月（同奇数年）と1年おきに異なる。産卵後、オスもメスも死ぬ。

河口に達すると盛んに採餌を開始し、しばらく沿岸域で生活した後沖合へ向かう。その年の秋まではオホーツク海全体で暮らしているようで、冬にかけて北太平洋の西部水域に移動、春まで過ごす。

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期<河川>									産卵			
孵化期<河川>	孵化											
稚魚の降海<河川>				降海								
河口～オホーツク海<海>						生活						
北太平洋<海>											生活	
遡上・産卵期<河川>							母川へ<迷い込みも多い>					
											産卵後死ぬ	

生息環境・分布

産卵期（8月～11月）には、海から河川に遡上し、中下流域の河川水がよく浸透する砂礫底に産卵床を作る。湧き水が必要とするサケ（シロザケ）とは異なる。

分布：朝鮮半島東北部から北米カリフォルニア州までの北太平洋、ベーリング海、北極海及びそれへの流入河川に分布する。

国内ではオホーツク海、日本海北部。遡上は、ほぼ北海道の河川に限られ、三陸海岸北部でもわずかに遡上する。北海道では根室海峡域を含むオホーツク海沿岸の河川が大部分を占める。

十勝では、十勝川、その他直接海に注ぐ川の下流部。サケ（シロザケ）と比較して遡上個体数がきわめて少ない。

食性

稚魚として降海する時にはほとんど餌を採らず、また産卵のため遡上する時には全く採餌しない。

海に降りてから、オキアミ類、ヨコエビ類、カイアシ類、

魚類、イカ類などを採る。

繁殖生態

産卵期は8月～11月。中下流域の、河川水がよく浸透する砂礫底に、産卵床を作る。湧き水が必要とするサケ（シロザケ）とは異なる。

産卵期になると、頭部と背部が黒っぽい灰色で、体側が赤紫っぽい茶色となる。オスの口先は非常に伸びて鉤状になり、オスの背ビレ前の背部が著しく盛り上がる。

メスは直径約1mの産卵床を掘り、大型で優位なオスの刺激を受けることで産卵を開始するが、このとき周囲にいた1～10尾以上のオスが並ぶようにして、放精をおこなう。平均1,500～1,900の卵を2、3回に分けて産み落とす。120～140日でふ化。

他生物との関わり

サケと同様に河川に遡上して肉食動物に食われたり、死んで分解されることにより、海の栄養を内陸に運び上げることになる。

興味深い話

■1年ごとに遡上盛期が異なり、西暦の偶数年には8月、奇数年には9月となる。サケと異なり、ほとんどすべてのカラフトマスが2歳で遡上するので、遡上時期を決める本能在混ざらず受け継がれていくことになり、それぞれの間の遺伝的な区別がはっきりしているのではないかと思われる。

■1年おきに豊漁となる魚として有名である。このことも上記のことと関わっている可能性がある。

■また、母川回帰性が弱く、母川以外への迷い込みが多いことは、産卵場所に対する依存性が低いためだと考えられる。

このことは、河川環境が変化しても分散していることで対応できることにつながる。

■夏沿岸で捕獲されたカラフトマスは脂肪分が多いため、品質が低下しやすく、そのため、我が国ではサケに比べて好まれていないが、一般に考えられているよりうまい魚である。缶詰の材料として最もよく利用される。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。他の地方では、「トピウ（背にこぶができたもの）」「エモイ」「ヘモイ」などと呼ばれるという。

配慮事項

サケと同様に長年、人工ふ化・放流が行われてきた魚である。本来カラフトマスは、サケと違って湧き水のない、低温の場所で発生する。そのため、ふ化場のサケに合わせた高水温の地下水で卵や仔魚が育成されると、早く成長してしまい、早い時期に放流せざるを得なくなる。結果として

早期遡上・産卵群が失われることになった。また、ごく希だが3歳で回帰したり、降海した年に遡上したりするものも見られ、人為的な現象だと考えられている。河川では全面禁漁である。

参考文献

「漁業生物図鑑 北のさかなたち」長澤和也・鳥澤雅 編、(株)日本海洋センター 1991

「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦 保育社
1990川づくりのための魚類ガイド、北海道河川環境研究会、(財)北海道建設技術センター、2001

「図説 魚と貝の大辞典」望月賢二 監修、魚類文化研究会 編、柏書房 1997

「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と溪谷社 1989

「北海道の淡水魚」稗田一俊、北海道新聞社 1984

「野外ハンドブック・10 魚 淡水編」桜井淳史、山と溪谷社、1981

「コタン生物記 II 野獣・海獣・魚族篇」更科源蔵・更科光、法政大学出版社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(葦原)
鳥類
樹林
タカ